



加茂遺跡発掘現場
(津幡町教育委員会提供)

**家持(越中國守)と
大伴池主(越前国守)の交流盛ん**
「万葉集」は勅命によつて
編纂されたものではないが、
当時の台閣の筆頭として君臨

本年は平城遷都千三百年である。奈良時代はわずか七年間であるが、中国的世界から自立し、日本という国家が作られた時代である。即ち律令制による国家経営の形態を作り、中国を意識した歴史書（記紀）の編纂によって国の主権者を明確にした。そして今日我々が恩恵を享受する日本初の文学「万葉集」による国民の内的統一性を主張したのである。



津幡町図書館
協議会会長

津幡町と万葉集

大久保 浩一

万葉はなかつたであろう。

現れる

天平時代のかほく市以北の能登は越中國で大伴家持の治

—越前国豫大伴宿禰池主が
来贈せる歌三首——として「今
月十四日を以て深見村に到来
し、彼の北方を望拝す。常に
芳徳を思ふこと、いづれの日

号は天平勝宝元年(1159)十二月十五日付で再び池主は深見村から家持へ書簡に付して歌二首を贈っている。「駅使を迎ふる事に依りて、今月十五日部下の加賀郡の境に到来る。面蔭に射水の郷を見、恋緒は深海の村に結ばゆ。」。いづれの書簡や歌も国境に横たわる砺波山による家持への心の隔絶感を述べたものである。

天平十八（七四六）年七月
大仏建立を目指す聖武天皇や
橘諸兄の期待を背負つて二十一
歳の青年貴族・大伴家持が
越中國守として赴任する。部
下の掾官として国庁（高岡市
伏木）で待つていたのは、傍
流そばりゆではあるが一門の年輩者大
伴池主おおともいけぬしである。池主とは都で
も歌の交わり（天平十年橘家
の黄葉きみじはの宴）があり、漢詩に
もすぐれ、歌の力量も家持を
上回る程の才をもつこの詩歌
の友がいなければ、いかに家
持が詩ごころを持つていたと
しても、万葉集に残された家
持の歌四七三首の約半数を数
える二二二首のいわゆる越中

した左大臣橘諸兄が関係し、その有力な部下であつた大伴家持によつて最終的に全二十巻にまとめられた事をみても、國家の意図と無縁ではない。その作品数は四千五百余首、作者の中には高名な文学者や歴史の表舞台で活躍した人々もいるが、三分の一は名もなき庶民の作であることも、それを物語つている。

の家柄に贈る。家持は十六日
ただちに返歌四首を池主に贈
つてゐる。律令時代の地方管
理は国・郡・里(郷)制で
村は現代の市町村のような行
政区分ではなく、郷^{ごう}里^りを広域
で捉えた呼称である。

遺産を大事にした町づくりを深見村を含む当時の北加賀は朝廷にとつて重要な穀倉であり、この時期の池主の任務は春の公出拳で、数日の滞在となつたであろう。同年（年

(世界連邦運動協会金沢支
部会員)